

意味もあり、『詩経・秦風・權輿』に“于我乎夏屋渠渠，今也每食无余”（先王様のありがたい思し召しのおかげで私は大層大きな屋敷に住んでいるが、近ごろでは禄が減り、何とか暮らしているといった有様だ）とあるが、この文中の“夏屋”は「大邸宅」のことである。

この通り、“春”も“夏”も、その成り立ちを振り返ってみると、緑の香りがぷんと立ち上がってくる。草萌える春、木茂れる夏、この生气あふれる季節を表すのにこれ以上ふさわしい字はあるまい。

含笑花

経営学部
矢田 博士

草解忘憂憂底事

花能含笑笑何人

草は解く憂いを忘るも
底事なにごとをか憂えん

花は能く笑みを含むも
何人なんびとをか笑わん



丁謂（九六六～一〇三七）、^{あざな}字は謂之（後に公言と改める）、長洲（今の江蘇省呉県）出身の人。北宋の第三代皇帝・真宗の時に主に活躍し、宰相の地位にまで昇った。しかし、第四代皇帝・仁宗の時に、罪を得て崖州（今の海南省崖県）に左遷され、晩年をその地で過ごした。

冒頭に挙げた二句は、彼の「山居」と題する七言律詩の頸聯の二句である。丁謂自身が施した注に「海南に含笑花有り」とあることから、「山居」という詩は彼が海南島に左遷されていた時期の作と判断される。とりわけ頸聯のこの二句は、北宋の当時において早くも高い評価を得ていたらしく、例えば北宋・司馬光の『温公続詩話』に、

丁相謂 善く詩を為る。珠崖に在りても猶お詩有り、百篇に近し。『知命集』と号す。其の警句に「草は解く……、花は能く……」なるもの有り。

といった記述が見られることや、北宋・釈惠洪もまた『冷齋夜話』巻五の中でこの二句を引用したうえで、「世 以って工と為す。」と述べていることなどからも、その点が窺えるであろう。

さて、当該の二句には「忘憂草」と「含笑花」といった二つの植物が詠み込まれている。「忘憂草」は「萱草けんそう（諛草）」とも言い、この草を植えて玩味すれば、人の憂いを忘れさせることができると言われることから、その名がある。また、例えば「焉にか諛草を得て、言に之を背に樹えん」（『詩経』衛風・伯兮）や「懐ふところに忘憂草を挾む」（劉宋・劉義恭「遊子移」）、「萱草 解く憂いを忘る」（唐・白居易「酬夢得比萱草見贈」）など、古くから詩の中にも詠み込まれている。

ところが一方の「含笑花」については、唐代以前の詩に詠み込まれた例を私は寡聞にして知らない。試みに「故宮【寒泉】古典文献全文検索資料庫」の「全唐詩全文検索」によって、「含笑」という語の用例を調べてみたところ、人の微笑むさまを形容したものが圧倒的に多く、花が開き始めるさまを形容する例もわずかに見られるものの、

描写の対象として選ばれているのは桃花や棠花^{からなし}などであり、「含笑花」そのものを詠み込んだ例は一つも見られなかった。とすれば、丁謂の「山居」における頸聯の二句は、中国古典詩歌史の上で、「含笑花」という花を詩に詠み込んだ最も早い時期の例として位置づけられることになるであろう。

では、そもそも「含笑花」とは、いったいどのような花なのであろうか。南宋・陳善の『捫蝨新話』巻四「論南中花卉」の条によれば、

南中の花木に北地に無き所の者有り。茉莉花・含笑花・閻提花・鷹爪花の類なり。性、皆な寒きを畏る^{おそ}るを以てなり。……含笑に大小有り。小含笑、四時に花有り。然れども惟^ただ夏中、最も盛んなり。又た紫含笑有り。香り尤も酷烈^{もつと}たり。茉莉含笑あり。皆な日の西のかた入るを以て、稍^やや陰れば、則ち花開く。初めて開けば香り尤も鼻を撲つ。予、山居して事無く、每晚^{すす}涼みて小亭の中に坐す。忽ち香風一陣を聞くに、室に満ちて郁然^{いくぜん}たり。知る、是れ含笑の開けるを。

とあるように、「含笑花」には小含笑・紫含笑・茉莉含笑などの種類があり、濃厚な香りを放つことを特徴とする花であるらしい。また手許にある植物図鑑によれば、日本では「トウオガタマ」「カタネオガタマ」と呼ばれているものがそれで、「含笑花は中国原産の常緑低木で高さ3 - 5 m」「花はバナナのような強い香がある」と説明されている。

海南島をはじめ中国の南方を原産とするこの「含笑花」。実は意外なことに、我々の身近なところでも目にすることができるのである。四月二十九日の祝日に家族で名古屋市の東山動植物園に行った折りに、私は偶然それを見つけた。星ヶ丘門から入りなだらかな坂道を下っていくと、右斜め前方に池が見えてくる。その池の北側を通る小径の、その入り口あたりの人気^{ひとけ}のない場所に人知れずその花はあった。花はクリーム色で赤紫色の縁取り

があり、濃厚な香りを漂わせていた。妻はそれを熟したメロンのような甘い香りと表現したが、私には子供の頃に使っていたバナナ味の歯磨き粉^{にお}の匂いのように感じられた。また花びらを開ききらずに咲くその姿は、まさにその名の通り、口許^{くちもと}に手を当て「笑みを含み」ひかえめに微笑む上品な女性の姿を彷彿とさせる。

「草は憂いを忘れさせるというのが、草そのものにいったいどんな憂い事があるというのか。花は微笑むことが出来るというのが、いったい誰に微笑みかけているというのか。」——花は別に人に微笑みかけるために咲いているわけではないけれども、東山公園の「含笑花」は、確かに私に微笑みかけてくれていた。

韓国キリスト教と内村

法学部
常石 希望

(一) 周知のごとく、韓国はアジアに冠たるキリスト教国となって久しい。1990年代初期の報告による信徒数は、プロテスタント1100万人、カトリック300万人、合計1400万人。これは全人口の30%、国民の3.3人に一人がキリスト教徒となる(ここ数年来の報告では、1000万人、25%、4人に一人という数字を目にすることが多い)。いずれにしろ、いつまでたっても人口の2%前後の日本とは大違いだ。一体どうして、韓国はこれほどまでのキリスト教国となったのであろうか？